

自然教育園におけるヒレンジャク *Bombycilla japonica* の捕獲記録

濱 尾 章 二*

A Capture Record of the Japanese Waxwing *Bombycilla japonica* from
the Institute for Nature Study, National Museum of
Nature and Science, Tokyo

Shoji Hamao*

は じ め に

鳥類の生息を確認するには直接観察が一般的な方法である。しかし、夜間活動する種の発見には長時間録音による音声の分析が有効である(植田, 2008)。また、やぶに潜んだり声を発しなかったりして発見が難しい種の発見には捕獲調査が有効である(大迫, 1989; 大鷹・中村, 1996; 濱尾, 2008)。国立科学博物館附属自然教育園では定期的に捕獲調査を行っている。2003年3月から2007年10月の間の捕獲調査により、発見された鳥種については先に報告した(濱尾, 2008)。今回、自然教育園では過去に1度しか記録(千羽・坂本, 1985)がないヒレンジャク *Bombycilla japonica* を捕獲、確認したので報告する。

稿を進めるに先立ち、標本の調査に協力頂いた国立科学博物館動物研究部の西海功、岩見恭子のお二方に感謝する。

調 査 方 法

調査は2009年2月26日に自然教育園内サンショウウオの沢上流部で行った(図1)。天候は曇り一時小雨、当日の最高気温は9.9℃、最低気温は4.1℃であった。調査では、スダジイ *Castanopsis sieboldii* が優先する林内の小道に36 mm メッシュ、長さ12 mのかすみ網を7枚設置した。網の高さは約0.5~2.4 mであった。

*国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Museum of Nature and Science, Tokyo. Email: hamao@kahaku.go.jp

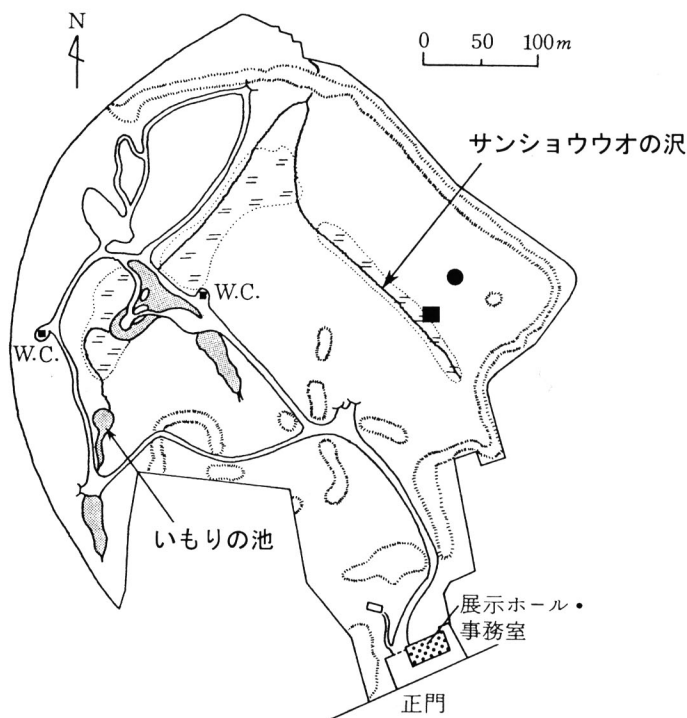


図1. 調査地. 黒い丸は2009年2月26日の捕獲地点を, 黒い四角は3月10日の観察地点を示す。

Fig. 1. Study area. A solid circle shows the place where the Japanese Waxwing was captured on February 26, 2009. A solid square indicates the place where it was observed on March 10.

自然教育園内には留鳥のほか, 冬鳥・漂鳥が越冬しており, 調査当日はヒレンジャクのほかヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* (3 個体), シロハラ *Turdus pallidus* (1), ツグミ *T. naumanni* (1), ウグイス *Cettia diphone* (2), ヤマガラ *Parus varius* (1), シジュウカラ *P. major* (2), メジロ *Zosterops japonicus* (4), アオジ *Emberiza spodocephala* (2), シメ *Coccothraustes coccothraustes* (4) が捕獲され, 標識 (足環) 装着の後, 放鳥された。また, 捕獲した個体は, 自然翼長・跗蹠長をノギスで測定し, 写真を撮影した。調査は関東地方環境事務所長による許可証 (鳥獣の捕獲等又は鳥類の卵採取等), 及び文化庁長官による天然記念物及び史跡旧白金御料地の現状変更許可の下に行った。

結 果

ヒレンジャクと考えられた個体は, ムクドリ *Sturnus cineraceus* 大のずんぐりした体形で, 全身は褐色から灰色をしていた (付図1参照)。また, 長い冠羽があった。背や雨覆・冠羽はぶどう色を帯びた褐色, 腰から上尾筒は灰色であった。嘴は短く黒色, 黒い過眼線は冠羽にまで伸びていた。腮から喉にかけて黒色部があり, 黒色部とそれより下部 (腹側) のぶどう褐色部との境界はやや不明瞭

であった。顔の前面（嘴側）は赤褐色を帯びていた。虹彩は明るく赤味のある褐色であった。眼の下と嘴の付け根に小さな白斑があった。翼はとがっており、風切と初列雨覆は翼を閉じていると青灰色であった。初列風切・次列風切・初列雨覆はいずれも先端部が黒色で、初列風切先端部は外弁から内弁まで細い白色部があった。大雨覆の先端は赤色であった。尾は短く基部は青灰色、先端に向かって黒色に連続的に移行し、先端部は赤色であった。下面は淡い褐色で、腹はわずかに黄色を帯びていた。下尾筒は赤褐色、脚は黒色であった。

計測値は自然翼長が 104.82mm、跗蹠長が 18.45mm であった。また、鎖骨の間に脂肪の蓄積は見られなかった。鳴き声を発することはなかった。

なお、金属足環が装着された捕獲個体と同一と思われる個体が、2009 年 3 月 10 日捕獲地点から 20～30m 離れた場所で観察された。その個体は、落葉樹高木の梢に 1 羽だけでとまっており、鳴き声を発することはなかった。

考 察

1. 同定、及び年齢・性の判定

捕獲され他個体は、大きさ・全体の体色、そして冠羽があることからレンジャク科 BOMBYCILLIDAE に属することがわかる。レンジャク科には全世界で 3 種が知られているが、ヒメレンジャク *B. cedrorum* は北アメリカ大陸に分布し (Mountjoy, 2005)、日本には記録がない (日本鳥学会, 2000)。3 種のうち尾端が捕獲個体同様赤色であるのはヒレンジャクだけであり、他の 2 種は黄色である (Mountjoy, 2005)。また、キレンジャク *B. garrulus* は、捕獲された個体とは異なり、初列雨覆と次列風切の先端に目立つ白色部がある (Mountjoy, 2005)。これらの羽色は、捕獲個体がヒレンジャクであることを示している。さらに、Pyle *et al.* (1987) によると、ヒメレンジャクの自然翼長は 89～100mm、キレンジャクのそれは 109～121mm とされているが、捕獲個体の自然翼長 (104.82mm) はこれらに合致しない。清棲 (1965) によるとキレンジャクの翼長 (計測方法は明示されていない) は 109～122mm、ヒレンジャクの翼長は 103～112mm とされており、捕獲個体の自然翼長はヒレンジャクの範囲に入っている。これらのことから、捕獲個体はヒレンジャクと同定される。捕獲個体の腹が黄色を帯びること、初列風切先端に黄色部がないこと、黒色の過眼線が冠羽まで続くように伸びていることも、ヒレンジャクであることと合致する (高野, 1980; 五百沢, 2004)。

ヒレンジャクはキレンジャクとともに、第 1 回冬羽への換羽で体羽・雨覆が生え換わり、新たな羽は成鳥のものと区別し難いという (山階, 1941)。捕獲された個体が幼鳥であれば風切・尾羽は幼羽のままであるはずだが、すり切れ方が激しい、色が淡い等、顕著な幼羽の特徴は認められず、幼羽であるかどうかはわからなかった。捕獲個体では外弁から内弁にかけてあった初列風切先端部の白色部は、五百沢 (2004) や Mountjoy (2005) によると、幼鳥では外弁にしかないとされている。しかし、山階 (1941)・清棲 (1965) は、成鳥雌も内弁の白色部を欠くとしている (山階は一部の雌は内弁も白色であるとしている)。国立科学博物館の成鳥雌の標本には白色部が外弁だけのもの、内弁にもあるものの双方があった。捕獲個体は明らかな幼羽ではなかったが、羽色から成幼の別は判断しがたい。しかし、捕獲個体の虹彩が明るく赤みを帯びる褐色であったことは成鳥の特徴と一致する。一般に虹彩の色は個体の成長とともに、灰色がかった暗い褐色から澄んだ明るい褐色に変化し、年齢の判定に

使われる（山階鳥類研究所，2009）。ヒレンジャクでも同様に考えられている（五百沢，2004）。以上のことから総合的に判断すると，捕獲個体は成鳥である可能性が高い。

ヒレンジャクは雌雄がよく似ているが，雄では喉の黒色部の下部の境界が雌よりも明瞭であると言われる（五百沢，2004）。これはキレンジャクでも認められている特徴である（Svensson, 1992）。また，雄にある次列風切先端の赤色部が雌にはなかったり，小さかったりする（Mountjoy, 2005）。さらに雌は全体に雄より鈍色で，腹の黄色味が乏しいという（山階，1941；Mountjoy, 2005）。また，ヒレンジャクの下尾筒は赤色であると記載されているものが多い（山階，1941；真木・大西，2000；五百沢，2004）が，清棲（1965）による，雌の下尾筒は栗色であるという。これらの雌雄の特徴とされているものについて，国立科学博物館の標本を調査した。喉の黒色部や次列風切先端の赤色部については，概ね上述の雌雄差が認められたが，雌雄の中での変異も大きかった。それに対して，腹や下尾筒の色には，雌雄で明らかな差が見られた。捕獲された個体は喉の黒色部下端の境界がやや不明瞭であり，次列風切先端に赤色部はまったくなかった。また，腹の黄色は淡く，下尾筒は赤褐色であった。これらは雌の特徴に合致する。そのため，捕獲された個体は雌であると考えられる。

2. 自然教育園における記録

自然教育園では，過去にキレンジャクは少なくとも4回の記録があるが，ヒレンジャクは1回の記録しかない（国立科学博物館附属自然教育園，2007）。ヒレンジャクの記録は1983年4月13日に園内いもりの池付近のコナラ林で7羽の群が観察されたものである（千羽・坂本，1985）。

本種はシベリア，ウスリーで繁殖し，中国・朝鮮半島・日本で越冬する（日本鳥学会，2000）。国内では西日本で多く見られ，東日本の平地の記録は春のものが多い（山階，1941；清棲，1965）。今回2月26日に捕獲，3月10日に観察された個体も冬季を通じて自然教育園にいたのではなく，春季の移動を始めた個体である可能性がある。ただし，群を作ることが多いと言われる（山階，1941）にもかかわらず，今回，捕獲の際にも後日の観察時にも単独であり，また脂肪の蓄積もなかったのも，迷行していたのかも知れない。いずれにしても，果実が多く果実食鳥類も多く越冬している自然教育園（宮下ほか，2008）は果実を食物とするヒレンジャク（清棲，1965；Mountjoy, 2005）が一定の期間生存可能な移動の中継地となったものと思われる。

要 約

2009年2月26日に自然教育園内でヒレンジャク1個体を捕獲した。この個体は，成鳥の可能性が高く，雌であると考えられた。また，同一個体と思われるヒレンジャクは，2009年3月10日にも観察された。

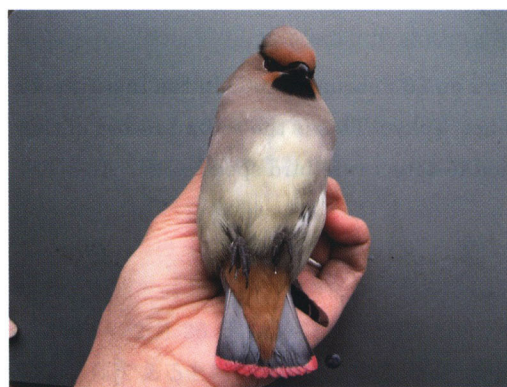
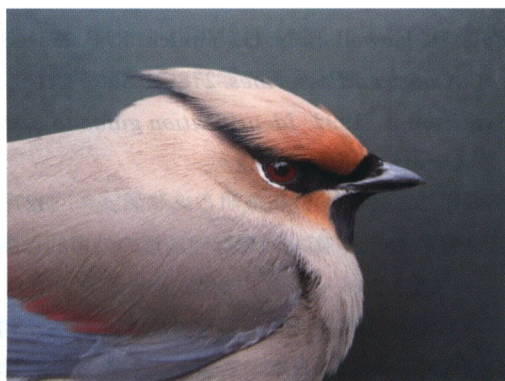
引 用 文 献

- 千羽晋示・坂本直樹. 1985. 自然教育園の鳥類の記録（1982～1984年）. 自然教育園報告, (16): 75-82.
濱尾章二. 2008. 自然教育園における鳥類の希少記録：捕獲・拾得記録の重要性. 自然教育園報告, (39): 63-69.

- 五百沢日丸. 2004. 日本の鳥 550 山野の鳥, 増補改訂版. 383pp. 文一総合出版, 東京.
- 清棲幸保. 1965. 増補新訂版日本鳥類大図鑑 I. 444pp. 講談社, 東京.
- 真木広造・大西敏一. 2000. 日本の野鳥 590. 656pp. 平凡社, 東京.
- 宮下友美・濱尾章二・森貴久. 2008. 鳥類による種子散布: 鳥種と植物種の結びつき. 2008 年度日本鳥学会大会講演要旨集, 205.
- Mountjoy, D. J. 2005. Family BOMBYCILLIDAE (WAXWINGS). In: del Hoyo, J., A. Elliott & D. Christie. (eds.) *Handbook of the Birds of the World, Volume 10. Cuckoo-shrikes to Thrushes*. 895pp. 304-318. Lynx Edicions, Barcelona.
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録, 改訂第 6 版. 345pp. 日本鳥学会, 帯広.
- 大迫義人. 1989. 鳥類相調査における捕獲, ラインセンサスと定点観察の特性. *Strix*, 8 : 179-186.
- 大鷹宏彰・中村雅彦. 1996. 上越教育大学構内における繁殖期の鳥類相. *Strix*, 14 : 113-124
- Pyle, P., Howell, S. N. G., Yumick, R. P. & DeSante, D. F. 1987. *Identification Guide to North American Passerines*. 278pp. Slate Creek Press, California.
- Svensson, L. 1992. *Identification guide to European passerines*. 368pp. British Trust for Ornithology, Norfolk.
- 高野伸二. 1980. 野鳥識別ハンドブック. 327pp. 日本野鳥の会, 東京.
- 植田睦之. 2008. 森林の夜行性鳥類の効率的な調査時刻と録音による調査の可能性. *Bird Research*, 4: T1-T8.
- 山階鳥類研究所. 2009. 鳥類標識マニュアル改訂第 11 版. 96pp. 山階鳥類研究所, 我孫子.
- 山階好麿. 1941. 日本の鳥類と其生態第 1 巻. 524pp. 岩波書店, 東京.

Summary

I captured the Japanese Waxwing *Bombycilla japonica* on 26 February, 2009 in the Institute for Nature Study, National Museum of Nature and Science, Tokyo. This is the second record of this species, and implies the importance of capture method to detect rare bird species.



付図 1. 自然教育園で捕獲されたヒレンジャク.

Appendix 1. A Japanese Waxwing captured in the Institute for Nature Study, National Museum of Nature and Science, Tokyo